

特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する研究

大分県教育センター特別支援教育部

指導主事 岡本 崇

I 研究の背景

平成 29 年 4 月に告示された特別支援学校小学部・中学部新学習指導要領総則編において、児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を行うことが求められている。中央教育審議会答申において、

- ①学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか
- ②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか
- ③習得・活用・探求という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか

という、三つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。これを受けて、全国的に、主体的・対話的で深い学びを実現するためにはどのように授業を改善すればよいかというテーマのもと、複数の特別支援学校において研究が進められている。県内においても、学校重点目標として、「主体的・対話的で深い学びの実現」を掲げ、実践に取り組んでいる学校がある。そこで、本研究では、県内特別支援学校における主体的・対話的で深い学びの実現のための課題と改善の方策を明らかにしたいと考えた。

II 現状と課題

特別支援学校における主体的・対話的で深い学びでは、児童生徒の障がいや状況などによって、他校種とは異なる特有の課題があると言われている。そこで、まずは県内の特別支援学校で実際にどのように実践が行われているのかについて調査を行い、現状を把握すること、課題を明確にすることが必要であると考えた。

III 調査・研究の内容

以下の設問のアンケート調査を行い、調査結果に基づく現状と課題の把握・分析を行った。

<調査対象>大分県内の県立特別支援学校 (16 校)
・盲・聾学校 2 校 ・肢体不自由・病弱特別支援学校 3 校 ・知的障がい特別支援学校 11 校

<アンケート項目概要>※設問 1～4 は「できている」「ややできている」「あまりできていない」「全くできていない」の 4 段階から選択して回答

【設問 1】回答者：管理職（校長・副校長・教頭の代表者）

1-1 主体的・対話的で深い学びについて、学校としてのビジョン（4 段階で回答）

1-2 主体的・対話的で深い学びについて、学校として具体的な取組（4 段階で回答）

1-3 主体的・対話的で深い学びの実現に向けての取組（自由記述）

大分県教育センター特別支援教育部

【設問 2・3・4】(回答者：各学部主事と各課程代表者)

「主体的(設問2)」「対話的(設問3)」「深い(設問4)」学びの実現状況について4段階で回答

【設問 5】(回答者：各学部主事と各課程代表者)

5-1 実現できていると考えられる内容について、以下の12項目から選択(複数回答可)

- ア. 興味・関心を高める イ. 見通しを持つ ウ. 振り返って次とつなげる
- エ. 互いの考えを比較 オ. 多様な手段で伝える カ. 先哲の考えを手掛かりとする
- キ. 共に考えを創り上げる ク. 協働して課題解決する ケ. 思考して問い続ける
- コ. 知識・技能を活用する サ. 自分の思いや考えと結びつける シ. 自分の考えを形成する

5-2 有効であった実践例について、具体的に記入(自由記述)

【設問 6】(回答者：各学部主事)

6-1 現状での課題と考えられる内容について、5-1と同様の12項目から選択(複数回答可)

6-2 課題点について、具体的に記入(自由記述)

IV 調査・研究の結果

1 設問 1-1・1-2 について

設問 1-1 は管理職を対象に、各学校全体としてどの程度のビジョンができているかについて問う設問である。「できている」と「ややできている」を合わせると62%であった。「全くできていない」という回答はなく、全校体制で周知し、取組を始めている学校が多いことがわかった(図1)。一方で、設問 1-2 で具体的な取り組みについて問うと、75%が「あまりできていない」と回答する結果となった(図2)。共通理解は進んでいるものの、具体的な取り組みはこれからであるといえる。これについては、1-3 の自由記述の回答と合わせて検討したい。

なお、障がい種ごとに差があるか、「学校種(障がい種)別による実現状況差」を分析軸としてクロス分析を行った。また、校内体制による差があるかについて、「主幹教諭の配置人数の違い(1~3名)」を分析軸としてクロス分析を行った。しかし、いずれにおいても差は見られず、県内の特別支援学校の共通の傾向といえる。

2 設問 1-3 について

管理職を対象に、主体的・対話的で深い学びの実現に向けての全校体制での取り組みについて自由記述で尋ねた。回答は、KJ法で「研究・研修会等、共通理解の場の設定」「授業改善の取り組み」「校内体

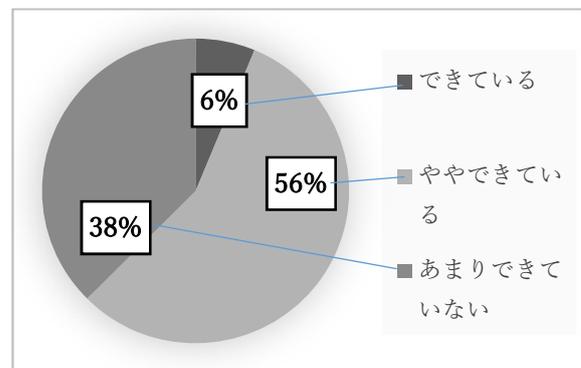


図1 設問 1-1 学校としてのビジョン

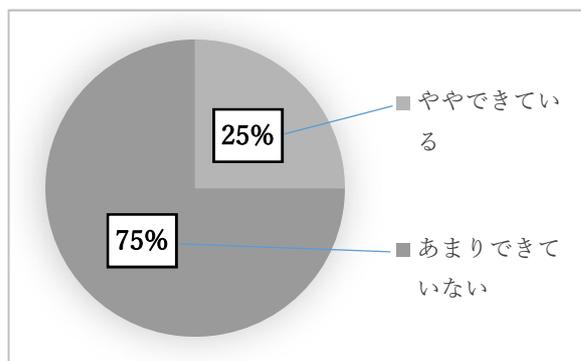


図2 設問 1-2 学校としての具体的な取組

特別支援学校における主体的・対話的で深い学びに関する研究

制の確立・外部連携の充実」「個別の指導計画の充実」に分類できた。(図3) 共通理解の場の設定は16校中11校が行っており、1-1と合わせて校内の共通理解が進んでいることがわかった。具体的な取組としては、16校中10校が授業改善の取組を行っており、より直接的な取組を優先していることがうかがえる。それに対して校内体制の確立・外部連携の充実は4校、個別の指導計画の充実は3校となっており、組織的な取組が今後の課題であることがわかった。

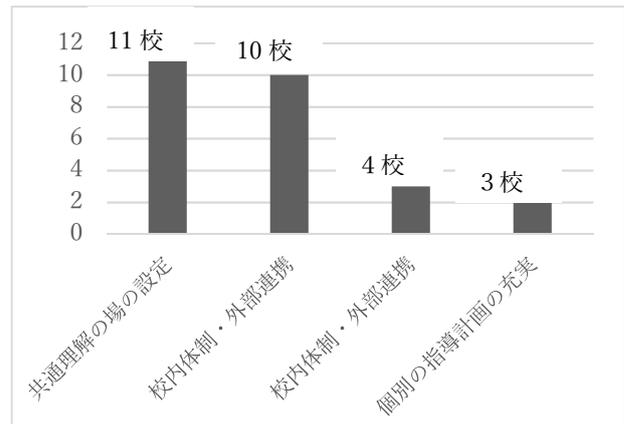


図3 設問1-3 自由記述の分類ごとの回答件数

3 設問2～4について

設問2で「主体的な学び」、設問3で「対話的な学び」、設問4で「深い学び」について、実現状況を各学部代表者に4件法で尋ねた。「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」に分けて尋ねたのは、それぞれの視点によって、意識や実現状況に差異が見られるか把握する必要があると考えたためである。

「できている」と「ややできている」を合わせた上位回答群と、「あまりできていない」と「全くできていない」を合わせた下位回答群に分けて比較した(図4)。すると、主体的な学びの実現状況が最も割合が高く上位回答が69%で、対話的な学びは60%と、どちらも半数を超えていた。対して、深い学びの実現状況は、下位回答が60%を超えている。このことから、深い学びの実現がもっとも困難であると考えられていることが分かった。

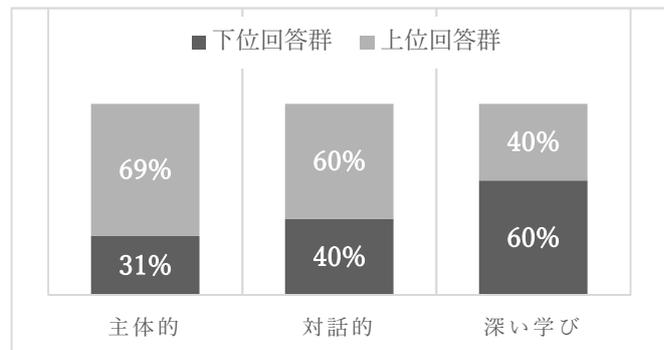


図4 「主体的」「対話的」「深い」学びの実現状況

さらに詳しく分析するため、設問2～4のそれぞれにおいて、「学部間の実現状況差」「学校種(障がい種)別による実現状況差」「課程(障がいの程度)による実現状況差」という分析軸を設定し、カイ2乗検定によるクロス分析を行った。すると、設問3「対話的な学び」の実現状況において、学部間で差が見られた。「できている」という回答が小学部では少なく(0件)、逆に高等部では多くなっている(8件)ことがわかった(表1)。

表1 対話的な学びの学部別実現状況

	小学部	中学部	高等部
できている	0	2	8
ややできている	22	19	26
あまりできていない	26	18	23
全くできていない	1	4	4

これは、学年・年齢が上がることで対話スキルが向上し、結果として「できている」という回答が増加したためではないかと考えられる。また、全体的な傾向として、管理職が1-1、1-2とも高く回答している学校は、各学部とも高い回答をする傾向があり、逆に管理職が低く回答している学校は、各学部とも低く回答する傾向があった。これらの点については、設問5-2や6-2と合わせて分析したい。

4 設問5-1・6-1について

大分県教育センター特別支援教育部

主体的・対話的で深い学びの実施状況について、設問 5-1 では成果、設問 6-1 では課題を前出の 12 のキーワードから選択する設問である。キーワードは、ア～ウが「主体的な学び」、エ～コが「対話的な学び」、ケ～シが「深い学び」に関するものである（図 5）。まずは、キーワードごとに集計し、回答数の多い上位 2 つをピックアップした。成果として多く挙げられていたのは「ア. 興味・関心を高める」と「イ. 見通しを持つ」で、どちらも主体的な学びに関わるキーワードであった。これは、設問 2 の結果とも合致する。大分県においては、これまでも「主体的な学び」に関する実践や研究を行っている特別支援学校が多く、成果を実感していると考えられる。逆に課題として多く挙げられていたのは「ケ. 思考して問い続ける」、「シ. 自分の考えを形成する」で、どちらも「深い学び」に関わるものであった。設問 4 の回答とも合致しており、「深い学び」に関しては課題が多いことがわかった。また、「学部間の実施状況差」「学校種（障がい種）別による実施状況差」「課程（障がいの程度）による実施状況差」を分析軸としてそれぞれクロス分析を行ったところ、病弱・肢体不自由校においては「オ. 多様な手段で伝える」を課題として挙げる回答が多かった。これは、重度・重複障がいの児童生徒にとっての対話のあり方を課題と捉えている表れと思われる。

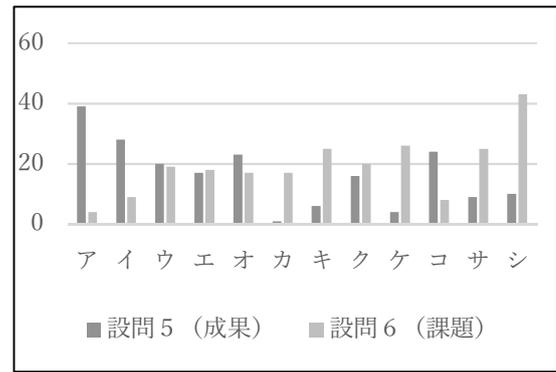


図 5 設問 5・6 のキーワード別回答数

5 設問 5-2・6-2 について

設問 5-2 で主体的・対話的で深い学びの成果、6-2 で課題を自由記述で尋ねた。成果が 47 事例、課題が 24 事例であった。それぞれの記述内容を KJ 法で「授業実践の様子」30 事例と「授業改善の方向性」41 事例に分類し、分析した。

5-1 授業実践の様子の分析

内訳は、小学部 7 事例、中学部 10 事例、高等部 13 事例であった。まず、指導の形態別実施状況を探ると（図 6）、生活単元学習が 15 事例と突出して多く、教科別の指導の事例はすべて合わせて 7 事例であった。また、学部が上がるごとに実施事例が増加しているものの、課題数も学部が上がるごとに増加している。実践例が増えることで、課題が顕在化したためと思われる。

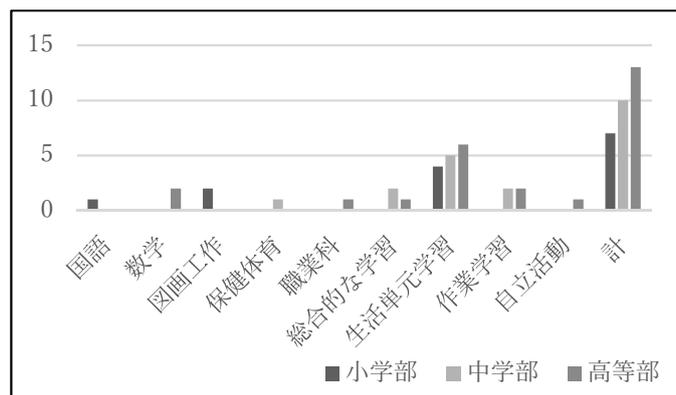


図 6 設問 5-2 における指導の形態別好事例数

次に、視点別の実施状況を分析した。設問 5-1・6-1 の 12 キーワードに照らし合わせて視点別で分類すると、好事例は主体的な学びが 13 事例、対話的な学びが 12 事例、深い学びが 5 事例であった。また、課題数は主体的な学びが 3 事例、対話的な学びが 2 事例、深い学びの事例は挙げられていなかった（図 7）。好事例数と課題数が比例しているが、実践が進むにつれて課題が具体化するためだと考えた。深い学びについては、実践数が少ないために課題が具体化されていないのではないかとと思われる。

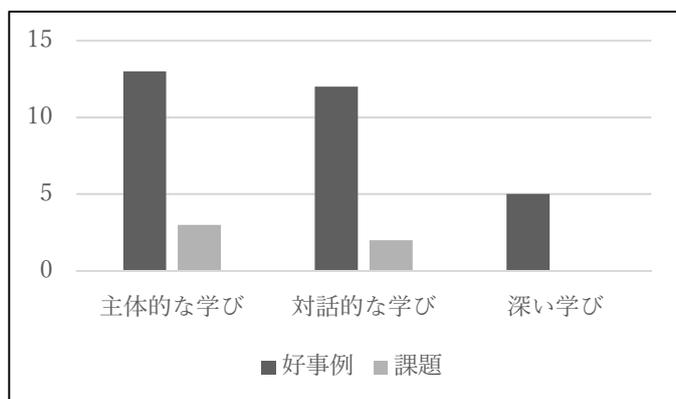


図 7 設問 5-2 主体的・対話的で深い学びの実施状況

5-2 授業改善の方向性の分析

授業改善に関わる成果の記述をさらにKJ法を用いて「運用上の工夫」6事例、「障がいの特性に応じた対応の工夫」8事例、「教材・教具の工夫」7事例、「授業の仕組みの工夫」8事例に分類した。同じく課題事例数はそれぞれ「運用上の課題」4事例、「障がいに起因する課題」9事例、「授業の仕組み上の課題」2事例に分類した。課題に関しては障がいに起因するものが突出して多く、一例を挙げると「言葉でのやりとりがないグループでは対話的な学びはどうあるべきか」というように、ほとんどが重度の児童生徒の音声言語以外での対話的な学びのあり方に関するものであった。また、他の事例と比較すると、記述に解決の方向性が示されておらず、困難さを示すにとどまる傾向があった。解決困難な課題として捉えられていることがわかった。

V 考察

今回の調査で、県内の特別支援学校の主体的・対話的で深い学びの実現にあたっては、いくつかの課題があることが分かった。

まずは、学校としての具体的な取り組みを明示する必要性である。今回の調査の分析から、管理職による設問1-2の評価が高い学校は、各学部の評価も高くなる傾向があった。校内体制づくりなどの組織的な取組を具体的に示すことが有効であろうと考えられる。次に、授業実践の充実の必要性である。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた課題は、学校ごとの特徴はあるものの、県内の特別支援学校で一定の傾向があることがわかった。特に「深い学びの実現」と「教科別の指導実践の充実」「重度の児童生徒の対話的な学びの実現」が今後必須であると考えられる。

一方で、今回の調査を通して、各学校独自で多くの実践が行われており、それぞれ好事例を有していることも明らかになった。事例を集約する過程で、例えばある学校で課題となっている「言葉でのやりとりがないグループでは対話的な学びはどうあるべきか」という事柄について、他の学校では「音声言語での表出のない生徒については、働きかけに対する反応（表情、体動、体調等）を観察しながら学んでいる状況を把握する」というような改善の方向性を示している事例があることに気づいた。好事例の集積と共有化により、相互に事例を認知し合うことで各校の実践の充実を図ることができると考えられる。今後は、学校全体としての取組のあり方や、具体的な授業改善の方策、障がいの状況に応じた工夫など、県内で共有することが有効であると考えられる。各学校の持つ「主体的・対話的で深い学び」実現に向けた実践的な好事例を集積し、どのように計画・実践・評価を行ったか、児童生徒がどのように変容していったかについて追跡し、共有化できるようにしていきたい。

VI 参考文献

- ・中央教育審議会 2016 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）
- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2016 知的障害教育における「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育課程編成の在り方～アクティブ・ラーニングを活用した各教科の目標・内容・学習評価の一体化～
- ・神奈川県立総合教育センター 2019 特別支援学校除ける主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に関する研究
- ・静岡県総合教育センター 2018 新学習指導要領に対応した特別支援学校における授業改善に関する研究